

メスヘティア・トルコ人の帰還と地域社会における受容 —ジョージア・サムツヘジャバヘティ州の多民族共生を背景に—

平成 26 年入学
ジョージア
山田 奈緒美

キーワード：ジョージア，ポストソビエト時代におけるネーション・ステート形成，強制移住と帰還，ディアスポラ・マイノリティーと故郷

対象とする問題の概要

第二次世界大戦末期の 1944 年 11 月、ジョージアの南西部、トルコとの国境に程近いメスヘティ地方（現サムツヘ・ジャバヘティ州）に居住していたムスリム諸民族が、ソビエト連邦政府によって中央アジアに強制移住させられた。彼らの大部分を占めていたのは、通常メスヘティ・トルコ人と呼ばれる集団である。強制移住の決定をした当時の最高指導者スターリンの死後も、メスヘティ・トルコ人のジョージアへの帰還が公式に認められることはなく、ソ連崩壊直前にウズベキスタンにおいて発生したフェルガナ事件によって、彼らの多くは中央アジアから北コーカサスやウクライナ、アゼルバイジャン等に再び移住することになった。



（↑かつてのモスクの建物で祈るメスヘティ・トルコ人）

この「ディアスポラの民」の帰還が政策的に取り上げられるようになるのは、ジョージアが欧州評議会（CoE）に加盟した 1999 年以降のことである。しかし、独立前後のいくつかの紛争に起因する難民問題を抱えるジョージア政府にとって、「新たな」民族を積極的に国内に迎え入れることには慎重にならざるを得なかった。2007 年の帰還法制定とその後の帰還政策の実施も、手続きの煩雑さや経済的支援の不足等により、実際に帰還者申請をした人々は 10000 人程度に留まった。現在、ジョージアに居住するメスヘティア・トルコ人の人口は約 1000 人と見積もられている。

研究目的

政策によって正式にジョージアへの帰還を果たしつつあるメスヘティア・トルコ人だが、帰還後の生活にはいくつかの課題が立ちだかっている。それは主に、いかに社会的な保障を受ける権利を手に入れるかという政治的問題、経済状況の芳しくない小国ジョージアにおいていかに生計を立てていくかという経済的問題、そして地域においていかに他の住民と接していくのかという社会的問題である。特に最後の問題は、ジョージアという多民族国家の中で生活基盤を確立するためには非常に重要である。フ

フィールドワークは、特に地域社会においてメスヘティ・トルコ人がどのように受け入れられているのかを、彼らと他の住民の日常生活の参与観察を通して明らかにすることを目的としている。また、フィールド調査で得られた結果は、博士予備論文において、政府による帰還政策やローカル NGO の帰還支援といった異なるレベルの議論の中に位置づけられ、ジョージア社会全体においてメスヘティ・トルコ人の帰還がどのような意義を持つのかを考察する一助となる。

フィールドワークから得られた知見について

2015年6月2日から8月1日にかけてジョージアに滞在し、首都のトビリシではメスヘティ・トルコ



コ人問題関連の文献の収集と研究者へのインタビューを行う一方で、サムツヘ・ジャバヘティ州ではメスヘティ・トルコ人の居住する集落に家を借り、住民の参与観察を行った。

サムツヘ・ジャバヘティ州は、人口の過半数をアルメニア人が占め、ジョージアでありながらジョージア語よりもロシア語の方が通じやすいという地域である。

サムツヘ・ジャバヘティ州の中心都市アハルツィへの郊外に位置するある集落には、2000年代に帰還してきたメスヘティ・トルコ人数世帯が、アルメニア人、ジョージア人、ロシア人、オセッソ人等と共に生活していた。

(↑郊外の小高い丘から眺めたアハルツィヘ市) 家を貸してくれたメスヘティ・トルコ人の一家は、自分たちを「メスヘティ人」と呼び、トルコ人でもなくジョージア人でもない、しかしトルコの文化もジョージアの文化も併せ持った存在として認識しているようであった。彼らが周辺の住民とにこやかにロシア語でおしゃべりをする様子を見て、当初は、ソ連時代の遺産であるロシア語という共通語を土台にした多民族共生社会において、メスヘティ・トルコ人も問題なく包摂されていると考えた。

しかし、調査期間が長くなるにつれて、彼らの他の住民との交流は、自家菜園で育てた野菜の売買や掃除用具の貸し借りといった、物を介した限定的なレベルにとどまっていることに気付いた。また、メスヘティ・トルコ人の子どもと他の住民の子どもと一緒に遊ぶことはなく、友達であるという認識もお互い持っていないようだった。他の住民は、彼らを「トルコ人」あるいは「タタール人」と呼び、ジョージア社会における異質な存在として差異化していたのである。



さらに、ラマダン期間中とラマダン明けには、ジョージア内のみならず、アゼルバイジャンやトルコ、北コーカサスといった地域からも多くのメスヘティ・トルコ人が集落を訪れ、共同体の結束を深めていたが、それに対して

(↑サムツヘ・ジャバヘティ州で人口の大半を占めるアルメニア人) 不信感・危機感を抱く住民もいた。このような日常生活の観察を通して、メスヘティ・トルコ人がジョ

ージアにおいて同じネーションの一員として認識されるためには、大きな課題が立ちふさがっていると推測された。

今後の展開・反省点

今回のフィールド調査により明らかになったのは、日常生活において、メスヘティ・トルコ人が、他の住民と一定の交流を保ちつつ、他の住民から自分たちを差異化し、また、他の住民から差異化されているということである。メスヘティ・トルコ人と他の住民は、一見すると良好な関係を育んでいるように思われるが、実際は、呼称や宗教的慣習等により、両者の溝は常に生産され続けている。ディアスポ



(↑メスヘティ・トルコ人女性たちのラマダン中の夜のお食事会)

ラが故郷に帰還したにも関わらず、故郷にそぐわないマイノリティーとして認識されているということは、ソ連の崩壊とともにジョージアというネーション・ステート形成が必要になったこと、そしてそのネーションが、エスニックな色彩を帯びるものであったことを示唆しているのではないか。今後は、政府による帰還政策及び地域 NGO による帰還支援の分析と合わせ、ジョージアのネーション・ステート形成の中でメスヘティ・トルコ人問題がどのような位置づけにあるのかを考察していきたい。

今回の調査地のメスヘティ・トルコ人コミュニティは、比較的新しい帰還者で構成されていたこともあり、ジョージア語をほとんど話せない人が多く、彼らの視点から住民の相互関係を分析することが十分にできなかった。彼らの視点からの帰還に関する分析は、今後の課題としたい。